

たとえあなたに選ばれなくても

Character

アリシア・カリス

伯爵令嬢。ルーカスとは相思相愛の婚約者であり、家族同然の幼馴染み。ルーカスの異母兄が結婚した半年後に、結婚式を控えていたが……

ルーカス・ディカイオ

第一騎士団所属。公爵家の次男だが、長男ニコラオスとは異母兄弟。ニコラオスとの仲は良好だったが、公爵家の執務からは距離を置いていた。

フォティア・ラルマ

伯爵令嬢。ニコラオスの婚約者。国の政策の影響で、嫁入り前だがニコラオスの子を身籠っている。

イレネ・ディカイオ

先代公爵夫人。亡き夫を深く愛している。ニコラオスの母であり、ルーカスとは血が繋がっていない。

ニキアス

王太子。近衛騎士団所属であるニコラオスとは学友であり現在も親しい間柄だった。

第一章 落とされた陰^{かげ}

王都の目抜き通りにあるカフェスピカは、濃厚な卵を使ったプディングと季節ごとに変わるフルーツケーキが人気の店だ。

賑わう店内の一角、観葉植物の陰になる席で、伯爵令嬢のアリシア・カリスは婚約者であるルーカス・デイカイオ公爵令息と向かい合っていた。

ルーカスの艶^{つや}やかな黒髪と深い濃紺の瞳は、比較的明るい髪色や瞳の者の多い王都において珍しい。

一見暗いイメージを与えてしまいそうな色をまとっているものの、彼は人々の視線を集めて止まなかった。

アリシアの頭一つ分は高い身長、騎士団に所属して日々鍛えられている体はぱっと見た印象よりも逞しい。濡れたように輝く瞳は匂い立つ色気を漂わせ、本人の希望とは裏腹に社交界の令嬢方の熱い視線を受けている。

明るめのハニーブラウンの髪にアンバー色の瞳というごく平凡な色合いを持ち、特筆すべき顔立ちではないアリシアが隣に立つことを良く思わない令嬢が多いことも承知していた。

それでも、ルーカスがそんな自分で良いと言い、言葉を惜しまずにいてくれるから、アリシアも胸を張って彼の隣に寄り添うことができている。

「今年のシーズンはずっと王都にいるんだよね？」

紅茶のカップを優雅な手つきで傾けながらルーカスが言った。

「そうね。今年はイリアも一緒だし、シーズンが終わるまではタウンハウスにいるつもりよ」

アリシアの五歳下の弟イリアは、今年十四になる。

十五歳から十八歳までの貴族の子や裕福な商人の子などが通う王都の学園へ入学するまで、王都に慣れるためにも弟は今シーズンずっとタウンハウスに滞在する予定だった。

そしてアリシアもその弟につき合うことになっている。

そもそも、結婚適齢期に入った子息子女が相手を見つける目的で開かれる舞踏会などは、婚約者のいるアリシアにとっては不要なものだ。それにカントリーハウスを切り盛りする母親のそばにいることの多いアリシアにとって、社交界での情報収集などは父や兄に任せている。

もちろん、女性同士の中での噂や情報も必要ではあったが、その点は従姉妹が社交好きであったためことが足りていた。

「兄上たちの結婚式が終わったら、半年後には私たちの結婚式だ。どちらにしろカントリーハウスに帰る時間はないだろうけどね」

ルーカスの兄は一ヶ月後、年明けすぐに結婚式を控えていた。

そして慶事は続くとばかりに、その半年後にルーカスとアリシアは結婚することになっている。

「立て続けだから大変よね」

「まあ、良いことではあるし、今この国では結婚や出産は大いに求められていることだからね」

「そういえば、ニコラオス公とフォティア様の間にお子さまを授かったと聞いたわ。これでデイカイオ家も安泰でしょうし、お義母様も喜んでいらっしやるのでは？」

ルーカスの兄であるニコラオスと婚約者のフォティアの間に子どもができたことは、つい最近わかったばかりだ。

待望の子であり、妊娠はかなり早い段階で判明したという。

「ああ。兄上も義母上も安堵されていたよ。父上が亡くなってから義母上は後継の心配が尽きなかったから、これで一安心だろうね」

自身の複雑な出自はおくびにも出さず、ルーカスは穏やかな顔で微笑んだ。

ニコラオスに子が生まれることがルーカスに及ぼす影響についてどう考えているのか、アリシアはその微笑みから読み取ることができなかった。

「私はこのまま騎士団所属でいられるし、結婚したら詰所に近い場所に屋敷を構えてもいいかもね」

結婚後の新しい生活に思いを馳せ、二人でああでもないこうでもないかと相談する時間はとても楽しかった。

明るい未来がくるのだと、何も疑わずにいられたから。

しかし、つつがなく今日という日が終わり、何の憂いもない明日を迎える。それが決して当たり

前ではないのだと、気づくのはもう少し後のことだった。



アリシアの住むロゴス国は、テオス大陸の南西に位置する比較的温暖な気候の国だ。

東隣にイリオン国、山脈を挟んで北側にダイナミス国と接しており、唯一隣接していない北東に位置するネペレー国と合わせて四国で大陸を形成している。

また、イリオン国と海を挟んだ先にトウ国という国があり、世界は大きくこの五カ国に分かれていると考えられていた。

そして各国はそれぞれ貿易を交わし、それなりの利益や損失を出しつつも穏やかな関係を築いていた。それがお互いの国にとって最善だと考えられていたからだ。

しかし、突如そのバランスは崩れる。

十年前、イリオン国の王が突然他国の侵略に乗り出したからだ。

イリオン国と陸続きかつ山脈などの遮るものがないロゴス国は、最初の侵略先として狙われてしまった。

国力に大きな差がなかったことが逆に不幸を招いたのか。十年もの間、繰り返される戦闘により両国ともたくさんの人や物が失われた。

このまま争いが泥沼化し、戦争が終わる日は来ないのではないかと人々が希望を失いかけたその

時、イリオン国内で国王を討つクーデターが起こった。

そして突如始まった戦争は、誰もが思ってもみない形で幕を引かれたのである。

幕引きをはかったのはイリオン国の王太子だった。

両国とも多くのものを失い、何の大義もない戦争は大きな爪痕を残した。

それでも、人々は生き、生活していかねければならない。

イリオン国は一方的な侵略に対する非を認め、できる範囲での補償を約束した。

疲弊した国内でも何とか補償金を工面し、そして今後侵略を仕掛けないという表明のために自国の第二王女を人質同然に差し出したのだ。

しかし、第二王女はイリオン国で異色の色味を持つ王女だった。その理由は彼女の母の出身国にある。

イリオン国の元国王は好色な王だった。

さまざまな理由をつけて王妃から第六妃まで、四大国から一人ずつ、そして自国から二人を娶っていた。第二妃はその中でもトウ国出身の妃であり、その娘である第二王女はテオス大陸では珍しい黒髪黒眼だった。

黒髪黒眼はトウ国人の特徴だ。海を挟むテオス大陸に住まうトウ国人は少ないため、王女を見た目はロゴス国でも珍しいものだった。

戦争の補償としてロゴス国へ迎え入れられた王女は、結果としてデイカイオ公爵家へ興入れした。自身がロゴス国においてどういった立場なのかを十分に理解していた王女は、目立たず、でし

ばらず、その存在を消したかのように過ごした。そして人質という立場にもかかわらず穏やかに暮らせることに感謝して、三十五歳という短い生涯を閉じたのだ。

その王女が遺した唯一の子、それがルーカスだった。



その日、ルーカスはいつも通り王都の警備に駆り出されていた。

ロゴス国の騎士団は大きく三つに分かれている。

主に王族や王宮を守るための近衛騎士団、王都周辺を警備する第一騎士団、そして王都以外の地域や魔物の出る辺境を守る第二騎士団だ。

近衛騎士団は警護対象の特性上ほとんどが貴族の子息で構成されており、第一騎士団は貴族だけでなく能力の高い平民、そして第二騎士団は平民や必要に応じて雇用される傭兵で構成されていた。嫡男ではないとはいえ、ディカイオ公爵家というロゴス国において高位にあたる家の出身であるルーカスが、第一騎士団に所属しているのは異例といえば異例だった。

身分的には近衛騎士団への所属が適任ではあるものの、近衛騎士団には腹違いの兄であるニコラスが所属している。それゆえ、ルーカスは無用な揉め事を避けるためにも第一騎士団へ席を置いていた。

たとえ兄弟の仲が良く本人たちの間では問題がなかったとしても、とやかく口を出したがる他人

というのはどこにでもいるからだ。

(兄上には感謝しても足りないというのに、口さがないことばかり言う連中には困ったものだ) ちょうど強盗犯を詰所に引き渡したところで、ルーカスは野心あふれるうるさ型の貴族に捕まっていた。

自身の出自が特殊であることとディカイオ公爵家の体面も考え、ルーカスはそういった相手に対しても極力丁寧な対応を心がけていた。

(そういえば、今日は一週間ぶりにアリシアに会える)

夕方になれば婚約者に会えることを思い出し、ルーカスは唇にほんのりとした笑みをのせた。

しかしそんな平穏な日常が、王宮を揺るがす事件によってあつという間に瓦解するのは、そのたった半刻後だった。

「王太子殿下が襲撃に遭いました!!」

詰所の扉を壊す勢いで飛び込んできた同僚の声に、所内には一瞬にして張り詰めた空気が流れる。

「詳細は？」

第一騎士団長の落ち着いた声に、慌てふためいていた同僚は息を整えながら話し出した。

「詳しくはまだです。王太子殿下はご無事なようですが、ただ……」

そこまで話した同僚がルーカスに躊躇(ためら)いがちな視線を超越した。

「なんだ？」

嫌な予感が、胸をよぎる。

「それが……ニコラオス公が負傷された」と
「負傷？ 兄上が？」

「たまたま仕事で王宮に出仕していたら、近衛騎士団の詰所が急に慌ただしくなって。おそらくまもなく伝達がくると思うが、漏れ聞こえた内容によるとニコラオス公が王太子殿下をかばわれたそうだ」

「怪我の状態は？」

「それはわからない」

「……そうか」

（あの兄上のことだ、きっと大丈夫のはず）

自身よりもよほど武芸に優れ、状況判断に長けた兄が簡単に命を落とすわけがない。そう思いながらも、さらに強まる嫌な予感が胸をざわつかせる。

「このままでは仕事にならないだろう。ルーカスは今から王宮に行つて来い」

「しかし今日は夕方までの勤務の予定です」

騎士団長の声に、はやる心を抑えながらルーカスは答えた。

「何事も柔軟な対応が肝要だ」

「……わかりました。ありがとうございます」

騎士団長の気遣いに感謝し、ルーカスはすぐに身を翻した。

肌がぴりぴりとして気が立っている。

自身のそういった感覚が一度として外れたことがないので、今回は外れて欲しいと痛いほど願った。

ルーカスが急ぎ足で向かった王宮内はかなりざわついていた。

「ルーカス卿！」

ルーカスを見かけた顔見知りの近衛騎士が慌てて声をかけてくる。

「兄上が王太子殿下をかばい負傷したと聞いたんだが」

「……ああ。急いで第一の詰所に伝達を飛ばしたが、入れ違いになったみたいだな。ニコラオス公はこちらだ。案内しよう」

「兄上の状態は？」

「……まずは医務室に行つてからだ」

一瞬言葉に詰まったのは気のせいだろうか。

そのまま二人は足早に王宮内を移動した。

警護対象が王侯貴族ということもあり、いつもは比較的穏やかな表情を浮かべていることの多い相手の常でない様子に、いよいよ悪い予感が高まる。

しかしここで何か問おうとも、詳しく教えてくれないこともわかっていた。おそらく、言えない理由があるのだろう。

「この中にニコラオス公はいらっしゃる。私は見張りを兼ねてここにいます」

「案内感謝する」

改めて礼を言い、ルーカスは兄が運ばれたという部屋の扉に視線をやった。怪我人が運び込まれているにしてはその部屋の周りは静かだった。酷い怪我であればあるほど、治療に当たる人も増えて周りはざわつくはずなのに。

そう思いながら、軽くノックをした後にルーカスは扉を開けた。

部屋の中には白いベッドが一つ置かれている。近づいて見れば、一人の男性が横たわっていた。その男性が兄であることにルーカスはすぐに気づく。

そして、異変は顕著だった。

いついかなる時も、兄は明るい笑顔を浮かべていた。

楽しいことがあった時はもちろんのこと、辛いことがあった時でも困ったことがあった時でも、少なくともルーカスの前で兄は完璧な姿を崩したことがなかった。

その兄が、目を瞑り静かに横たわっている。

「あに……うえ？」

顔色が悪く、生の息吹の感じられない姿。

ルーカスはベッドに駆け寄るとその手を取った。ほんのりと温かい兄の手は、しかし握り返してくることはない。

「兄上？」

温かいのに。温もりはあるのに。

誰に言われずともわかった。兄の命が、すでにここにはないということを。

「なぜ？」

王太子殿下をかばい負傷したと聞いた時も、兄だから大丈夫だと言いつけていた。

それでも、自分の予感が決して良いものではないのだと心のどこかではわかっていたのかもしれない。

悪い予感は外したことがなかったから。その心底嫌な感覚は、今までの経験で身に染みていたものだった。

「なぜこんなことに」

いつでもルーカスのことを考え、心配してくれていた人生の指針でもある兄の死。

孤独に震えていた自分を救ってくれた人。大切に、幸せになつて欲しい人。

そして理解する。

導き手を失った事実と、これから降り掛かってくる現実を。

（誰か嘘だといって欲しい）

心の底からそう願う。叶えられることがないその希望を、血を吐く思いでこい願った。



夕方からルーカスと会う予定を控え、アリシアは午後のティータイムを両親と共に過ごしていた。「そういえば、フォティア様のお祝いは早めに用意した方がいいかしら？」

お気に入りの紅茶に笑顔を浮かべながら言う母の言葉に、アリシアは手元に落としていた視線を上げる。

「まだご懐妊がわかったばかりだと聞いていますし、性別も出産予定日もはっきりしないと思いますから、もう少ししてからでもいいのでは？」

「そうね。用意する物によつては時間がかかることもあるけれど、急がなくてもいいのかもしれないわね」

こんなのにんびりとしたティータイムは久しぶりだった。

父も母も、日中はそれぞれ出かけていることが多く三人そろふことは珍しい。

「それにしても、婚約しているとはいえ結婚の前に子を授かるなんて、私の時には考えられなかったものだけだ」

小さくため息をつく母にアリシアは苦笑する。そんな二人を見ながら、父が言葉を続けた。

「先の戦争で多くの人が亡くなったこともあつて、民を増やすことは今国で一番重要なことと言ってもいいからね」

わりにはつきりともを言う母に対して、父はいつも比較的穏やかな言いようをする。

戦争で国は多くの民を失った。そして国力は人の多さに比例するものだ。

税を納めるにも、畑を耕して食物を手に入れるにも、物を作るにも、何に関しても人を必要とするこの世の中において、人口の減少は国力衰退に直結する。

そこで国は新しい政策を始めた。

今までは婚姻後に生まれた子のみを両家の子と認めていたが、今は婚約中に生まれた子も同じ扱いとすることになったのだ。

婚約には政略的なものもあれば純粹に気持ちでつながったものもある。

どんな状況であれ、婚約中も含めてなるべく早い段階から子を持つてもらい、少しでも多くの子が生まれることを国が推奨していた。

「ニコラオス公は四大公爵の中では一番若く、そして後継がいなかった。家の安泰を思えば喜ばしいことだよ」

「お父様、ニコラオス公は結婚と同時に近衛騎士を辞されると聞いていますが、ルーカス様の所属は第一騎士団のままなのかしら？」

アリシアは今日ルーカスに会う時に聞こうと思っていた疑問を、ちょうど良い機会とばかりに問いかける。

「どうだろうね。彼は第一の方が合っている気がするが……。王家が近衛騎士にと希望されるかもしれない」

「この前お会いした時は、結婚後には第一の詰所の近くに住もうかと話していたのだけど」

ルーカスの所属がどこになろうとも、アリシアの生活に大きな変化はないだろう。ただ、彼にとつては王宮よりも第一騎士団の方が心理的な負担が少ないように思えた。

「まあその辺りのことはおいおい決めていけばいい。ルーカス卿はおまえの希望も聞いてくれるだろうし、二人でよく話し合うことだ」

父の言葉を区切りに、母が「そういえば」と声を上げた。

「せっかく王都にいるのだから、今から買い物に行きましょう。嫁入りの品物はいくらあっても足りないくらいですからね」

ルーカスとの待ち合わせ時間までに帰って来るには、今からすぐに出かけなければならない。そうはやる母に、アリシアはくすぐったいような気持ちになった。

自分は両親に恵まれていると思う。

子どものことをよく考えてくれる二人の姿を見ながら、ルーカスと家庭を築くならこんな温かい家庭でありたいと願った。

そんな和やかな空気に冷たい風が吹き込むかのように、ドアのノック音が響く。

「旦那様、お寛ぎのところ失礼いたします」

至急の要件とのことで執事が声をかけてきた。

心なしか顔色の悪い執事に疑問をもったのもつかの間、その後につけられた言葉にアリシアは時が止まるのを感じた。

「王宮から使いがいらっしやいました。……ニコラオス公がお亡くなりになったとのことです」

それは予想だにしない事実で、同時にこれからのアリシアの運命を大きく変える言葉だった。



その日は朝から雨雲が厚くたれこめ、シトシトと雨が降っていた。降り続く雨はまるで尽きることのない涙のようで、参列者の悲しみを呑み込んでいった。

将来を囑望^{しよぼう}された若き公爵のあまりにも早い死。

突然のできごとに人々は惑い、そしてその陰でひそひそと囁き合う。

「ニコラオス公が亡くなったということは、公爵家の跡継ぎはどうなるのでしょうか」

「ディカイオ前公爵の子はニコラオス公とルーカス卿のお二人でしょう？」

「しかしルーカス卿は前公爵夫人の実子ではないですし」

「しかし次男というのは何かあったときのスペアですから、この場合はやはりルーカス卿が跡を継がれるのでは？」

社交界というのは情報の収集力と先を見る力がものをいう世界でもある。

ロゴス国において公爵の位を持つのはたった四家のみ。その内の一つ、ディカイオ家を誰が継ぐのかというのは、すなわち今後誰と縁を結ぶべきかに繋がってくる。

口さがない連中を、しかし声高に非常識だと咎めることはできない。公爵家と特別親しくなかった家々にとって、葬送の場は社交界の延長でしかないからだ。

あからさまに声を上げているわけではないが、特別潜めてもない会話は近くにいる者の耳には届いてしまう。

故人を偲ぶでもない会話に、アリシアは無意識に顔をしかめた。

「この場であんな話をするなんて」

「あの人たちにとってニコラオス公が亡くなったことは事実の一つでしかないのでしょう。嫌な考え方ではあるけれど、社交界に出るからには割り切らなければならない部分でもあるわ」

「たとえそうであっても、私はそんな考え方に染まりたくない」

若さゆえの正義感と言われてしまうだろうか。母の言葉に、アリシアはどうしても頷けなかった。重苦しい空気を孕みながら、ニコラオスの葬儀はしめやかに執り行われていく。

朗らかなニコラオスはディカイオ家にとって太陽のような存在だった。その大きな庇護を失い、残された者たちはただ立ち尽くす。

多くの者たちの悲しみと呆然とする心を置き去りにしたまま、ニコラオスの葬儀は終わりを迎えるようとしていた。

そんな中、先ほどまでそばにいたルーカスの姿をアリシアは探す。明らかに顔色の悪かった彼が心配だったからだ。

はたして雨にけぶるその先に、ルーカスはいた。

ルーカスの手は今にも倒れそうなフォティアの肩に置かれている。

ニコラオスの母である前公爵夫人と婚約者のフォティアは、共に酷く憔悴していた。

涙に暮れる二人をなだめ、ルーカスが公爵家へと戻る馬車へ先導している。

悲しみは時が癒すと言うけれど、この場を支配する大きな悲しみが癒やされるのにどれほどの時を必要とするのか、今は誰にもわからない。

まだ婚約者でしかない自分はどれだけルーカスに寄り添っても許されるのか。

アリシアはそんなことを思いながら彼らを見つめていた。

そしてルーカスは今日、公爵邸へ帰らないと言った。大きな悲しみに押しつぶされそうになっている彼が、今夜は一人でいたくないとアリシアの家への滞在を希望したからだ。

そんなルーカスの思いを汲んで、両親はその願いを許可した。彼らもまた、今のルーカスに必要な人が誰なのかをよくわかつていたからだろう。

これから待ち受ける大きな変化は、ルーカスの気持ちが落ち着くのを待たない。

どれだけつらく悲しみに打ちのめされていようと、明日からルーカスは公爵家を継いでいかなければならないのだから。

「私はルーカスの支えになれるのかしら」

ぽつりと、アリシアはそう呟いた。

ルーカスの滞在をカリス家の者たちは歓迎した。いつもよりも少しだけ豪華な食卓を囲みながら穏やかな時間を共有する。

「ルーカス卿、その料理はシェフの今日のおすすめだそうだ」

アリシアの父にそう声をかけられて、ルーカスはメインとして出された肉料理を見た。それはカリス家に滞在するたびにシェフが振るまってくる一品だ。

はつきりと伝えたことはないが、ルーカスが好んでいることに気づいていたのだろう。

「そういえば、前にルーカス兄と一緒に取り上げた仔がこの前出産したよ」

久しぶりにルーカスと顔を合わせたイリアが積極的に話しかけている。

元々カリス兄弟きょうだいとルーカスは幼馴染だ。幼い頃の思い出には必ずお互いがある。そんな思い出の一つに、カリス家の馬屋での出産があった。

イリアが話題にしたのは、その時生まれた仔馬こうまが育って今度は出産したという話だ。それはルーカスにとっても驚きと共に嬉しい知らせだっただろう。

「そうか。無事に生まれたのなら良かった」

そう答えたルーカスは落ち着いた表情だ。

葬儀直後よりは顔色も戻ってはいしたが、アリシアとしてはその落ち着きの方が心配だった。

ルーカスには自分の気持ちを抑えようとする傾向がある。何かつらいことがあっても、自身の中に抱え込んでしまうのだ。

だから周りがそのつらさに気づかないことがよくあった。しかし幼い頃からそばにいたアリシアに隠し通すことはできない。

(きつと今も、無理をしているわね……)

もはや習性となってしまうた性格が変わることはないだろう。

だからこそ、アリシアの家で過ごす時間が少しでもルーカスの心を慰めてくれるといい。

アリシアはそう思わずにはいられなかった。

あえてニコラオスの葬儀に触れることなく過ごした晚餐を終え、アリシアはルーカスと共に自身

の部屋へと移動した。

疲労や遅めの時間であることを考慮し、いつもであれば食後に家族と一緒に楽しむお茶を断つてのことだった。

「最近ハーブティーに凝っているのよ」

そう話しながら、アリシアはカモミールとローズをブレンドしたハーブティーをゆつくりと淹れる。部屋の中にほのかに甘い香りが広がった。

「兄上がもうどこにもいないなんて……今でも信じられないんだ」

二人がけのソファに腰掛けたルーカスがぼつりとそうこぼす。

突然のニコラオスの死から、抗うことのできない大きな流れに吞まれてルーカスはさまざまな手続をした。そして今日間違いないニコラオスを見送ったはずなのに。

それでも、もうこの世のどこにもあの太陽のような存在がいけないことが信じられないだろう。

「そうね。私も信じられないわ」

そつと、アリシアは寄り添うようにそう言った。

「私は……兄上のようにはなれない。そもそも本当の意味での代わりですらないのだから」

頭を抱えてうつむくルーカスの隣に座り、アリシアは包み込むようにその頭ごと抱きしめる。

大きな体を縮こまらせ少し震えているルーカスにとって、ニコラオスの存在がどれほど大きなものだったのかをアリシアは充分過ぎるほど知っていた。

「何があってもそばにいるわ」



アリシアにはそれしかできないけれど。それでも、どんなことがあっても自分はルーカスの味方なのだと伝え続けた。

（私はなんて無力なのだろう）

アリシアはそう痛感する。

これからルーカスが否応なしに巻き込まれていく世界において、アリシアには何の力もない。だから、ただひたすら抱きしめる。冷え切ってしまったルーカスの、その心ごと温めるために。

大きな悲しみを包んだ夜が明けた。

陽の光の差し込むサンルームで、アリシアはルーカスの好きな紅茶を丁寧に淹れながら彼を待っていた。この後ルーカスは公爵邸へ戻るという。

「おはよう」

そう挨拶をしながら、扉を開けてルーカスが入ってきた。

昨日は目の下にうっすらと見えた隈も、今日はいくぶん薄くなったようだ。

「おはよう。よく眠れた？」

「ああ。ありがとう」

元々感情を見せることの少ないルーカスは、はたから見分にはずいぶん落ち着いている。

「騎士団の方は当休みをもらうことになったよ。いずれ退団することになるとは思うけれど、まずは家の環境を整えてから騎士団側の引き継ぎをすればいいと言ってもらえて助かった」

今後のことを、ルーカスはいつもの世間話のように話す。

「寮はどうするの？」

「今日退寮してくる」

ルーカスは第一騎士団に所属してからずっと寮暮らしをしていた。

公爵邸にはルーカスの義母にあたる前公爵夫人とニコラオスが住んでいたこともあり、ルーカスとしては寮の方が気が楽だったのだろう。ニコラオスは公爵邸から出仕すればいいと言ってくれたみたいだが、義母の手前けじめは必要だと考えていたようだった。

「しばらくは義母上や家令に確認しながら仕事を進めなければならぬし、なるべく早急に領地のことでも知らなければいけないから。……時間がいくらあっても足りないくらいだよ」

次男という、嫡男に何かあった時の代わりの立場だったルーカスだが、その実公爵家の仕事に関してはおぼろげに等しかった。

ルーカスの父も兄も仕事を教えたり分け与えたりしたかったようだが、義母の強固な反対があったという。

その出自を思えばそれも仕方のないことだったのだろう。

ルーカスとしても関係に波風を立てたくなかったのか、騎士団に入って以降は話題に上がることもなかったようだ。

それが仇^{あだ}になるなど誰が思うものか。

しかし事情がどうであれ、現時点で公爵家を継げるのはルーカスしかない。領地のことも王

都での公爵家としての仕事も、どちらも放っておけないとなればすべてはルーカスの肩にかかってくる。

これから仕事を覚え、こなしていかなければならない執務を思えば、ルーカスが焦りを感じるのは当然だった。

二十五歳を迎えていたニコラオスでさえ若き公爵と言われていたというのに、やっと二十歳になったばかりのルーカスなど他の高位貴族にとっては子どものようなものだろう。

もちろん親身になってくれる人もいるだろうが、足をすくおうと虎視眈々と狙ってくる手合いもいる。

そう考えると、周りはすべて敵と思うくらいでいなければならない。

「落ち着くまでは会う時間を作るのも難しいかもしれない。私としてはアリシアに癒されたいのだけだね」

苦笑いを浮かべながら言うルーカスに、アリシアは困ったように微笑んだ。

「そばにいたいけれど、邪魔になつてはいけないわね。手紙を書くのは大丈夫かしら？」

「それはぜひ。アリシアからの手紙を励みに頑張るよ」

ふんわりとした微笑みに不意をつかれて、アリシアは赤面した。

「早くまた会いたい」

切なく囁かれた言葉にアリシアは胸元をぎゅっと握りしめる。

二人とも思うことは同じなのだろう。今までずっと、お互いが必要な存在であると伝え合ってた

たから。

アリシアはルーカスの状況が落ち着けばすぐにでも会えると思っていた。
だから、この日を境に会うことができなくなるなど、この時の二人が気づくことはなかったのだ。



アリシアがルーカスと初めて会ったのは五歳の時だ。

カリス伯爵領は王都から馬車を三日ほど走らせた先にある。

国内でも一、二を争う穀倉地帯であり、王都の食糧の多くはカリス伯爵領から賄われていると言っても過言ではなかった。

アリシアの父であるカリス伯爵は温厚な人物であり、細やかに領地を管理し大きな野心を持つことなく堅実に領地運営をしている。

そのおかげもあり領地は栄え、人々の暮らしは他の領と比べても豊かだ。

そんなカリス伯爵領の隣にディカイオ公爵の領地があった。

公爵自身は王都での仕事があり、領地には管理者が置かれている。そして領内にはディカイオ家のカントリーハウスがあった。

そのカントリーハウスに住むことになったのが、隣国のイリオン国から輿入れしてきた王女だ。

王女にどんな事情があるのかを幼いアリシアが知ることはなかった。しかし隣の領地ということもあり、アリシアが五歳になったある日、一つ年上のルーカスと会うことになったのだ。

アリシアには三歳上に兄が、五歳下に弟がいたこともあり、特殊な事情で友人を作ることが難しいルーカスの遊び友だちに選ばれたのだろう。

カリス伯爵が中央政治への野心を持っていなかったことも大きかったのかもしれない。

大人たちの思惑を知らぬまま、アリシアたち兄妹弟きょうだいとルーカスはあつという間に仲良くなった。

兄と弟がいたせいか幼いアリシアはそこそこに活発な子どもで、ルーカスと弟と共に転げ回るように遊び、兄がその三人を見守る形で多くの時間を過ごした。

大らかな両親に育てられたからかそれとも元々の性格なのか、アリシアはルーカスの見た目に対して否定的なことは何も思わなかった。

むしろあまり見かけることのない綺麗な黒髪と濡れたように見える濃紺の瞳が不思議で仕方なく、何度もしげしげと見つめてはルーカスに戸惑われた。

そしてある程度大きくなってから、周りがルーカスの持つ色味を良く思わないと知り心底驚いたくらいだ。

だから、アリシアの思い出にはいつもルーカスがいる。

兄が進学で王都に行ってから、領地にいる母の元で過ごしていたアリシアはルーカスと共にいた。そしてそれは十五歳になってルーカスが学園に通うまで続いたのだった。

ルーカスが王都に向かうその年、アリシアに大きな変化が訪れる。それが、ルーカスとの婚約

だった。

貴族の婚約は政略的な意味合いが大きい。結婚は家と家を繋ぐものと考えからだ。ただ、カリス家は他家との繋がりを特別求めておらず、何よりもルーカスとアリシアが互いを強く望んだことで婚約は認められた。

好きな相手と結ばれるのは、貴族の娘にとってこれ以上ない僥倖だ。きようこう

本来公爵家が相手ともなると身分違いではばかられるものではあるが、ルーカスが次男であること、母親が公爵夫人ではないこと、さらにはカリス伯爵領が裕福であること、なんといっても戦争で適齢期の子どもが少なかったことなど、多くの理由があって成立した婚約だった。

そしてルーカスが王都の学園に入学して一年後、アリシアもまた同じ学校に通い始める。

領地でも学園でも、一年の差があるとはいえいつだってアリシアのそばにはルーカスがいた。

お互いが在学中は長期休暇になると一緒に領地に戻り、一年先にルーカスが卒業して騎士団へ入団してからはアリシアだけが休暇に領地へ戻った。

そしてアリシアの卒業を待つて、二人の結婚の日取りが決まる。

ちょうどその頃ルーカスの兄ニコラオスも結婚が決まり、公爵家は慶事が続くことになるはずだった。

誰もが幸せになる、未来があるはずだった。



その日アリシアは専属侍女のタラッサと護衛騎士と共に、母行きつけの服飾店と宝石店を巡った後、帰りにカフェスビカでフルーツケーキを買おうとしていた。

無事に母のお使いも終わらせ、ご褒美とばかりに店内のショーケースをのぞき込む。

ルーカスと一緒にこのお店を訪れたのはまだそれほど前ではないのに、アリシアにはひどく懐かしく感じられた。

思えばニコラオスの葬儀の翌日以降、ルーカスと会うことはできていない。

まめに手紙は送ってくれるものの、忙しくて会うだけの時間が取れないとのことだった。

ルーカスと出会ってから、学園の長期休暇以外でこれだけ長く会えなかったことはあっただろうか。

物理的に遠く離れているわけでもなく、会おうと思えば会える距離にいるからこそ、その事実寂しさを感じていた。

「お嬢様」

ショーケースを見ながら少しぼんやりとしていたらしい。

タラッサに声をかけられて、アリシアははっと我に返る。心配そうにこちらを見るタラッサにアリシアは小さく微笑みかけた。

「やはり今日も季節のフルーツケーキにするわ」

注文を伝えてアリシアは一足先に馬車へと戻る。

程よく混み合っている店内を抜け護衛騎士が開けた扉を出たところで、アリシアはここにいるはずのない姿を視界の端に捉えて足を止めた。

距離がそれなりにあることを考えると、気づいたことに驚くくらいだ。

「ルーカス？」

道を挟んだ向こう、ドレスを扱う店の前で、馬車から降りる女性に手を差し出しているのは間違いない。ルーカスだった。

彼は今日王都の店に來ると言っていただろうか。

そもそも忙しくて家から出ることすらままならないと言っていないかっただろうか。

ルーカスを送ってくれた手紙は内容を覚えてしまうほど何度も読み返した。

アリシアと会う時間すら取れないと言っていた彼は、いったい誰をエスコートしているのか。

そんな疑問がアリシアの脳裏を駆けめぐる。同時に、不安のためか鼓動が嫌な感じに速くなった。

そして馬車の影になっていた女性の顔が見えた時、アリシアははっと息を呑んだ。

女性はニコラオスの婚約者、フォティアだった。

ルーカスにエスコートされて馬車を降りたフォティアは、そのまま彼の腕に手をかけて当たり前のように一緒に歩いていく。そんな二人の姿が店の扉に吸い込まれていくまで、アリシアはその場から動くことができなかった。

(きっと妊娠によってこれからお腹が大きくなるフォティア様のドレスを作りきたのよ)

アリシアはそう思った。

(それならわざわざお店まで来なくても公爵家に呼べばいいはずよ)

そして次の瞬間自ら否定する。

(もしかするとフォティア様の気分転換もかねたお出かけなのかも)

一瞬にしてアリシアの頭の中にいろいろな考えが浮かんで消えた。

どれも正しいかもしれないし、正しくないかもしれない。事情がわからないアリシアには推測することしかできないからだ。

(私と会う時間は取れないのに?)

何度否定しても、どうしても浮かんでしまう考えをアリシアは慌てて打ち消そうとする。

(なぜ私はこんなところでルーカスがフォティア様をエスコートしている姿を見ていなければならないのかしら?)

心のざわつきがおさまらない。

ルーカスが、アリシアと会う時間はないと言ったのにフォティアと出かけているからだろうか。

それとも、他の女性と二人で出かけることを教えてくれなかったからだろうか。

いや、そうではないことはアリシアにもわかっていた。

もちろん、忙しい中で婚約者のアリシアではなくフォティアへ時間を割いたことは気になる。

でもそれ以上に、ルーカスの初恋がフォティアであることを、アリシアだけが知っていたからだ。

思い返せば、アリシアは子どもの頃からルーカスが好きだった。

小さな頃のルーカスは活発なアリシアの後ろに隠れていることも多く、幼い女の子が憧れるような王子様ではなかったけれど、何よりも人を思いやる優しさを持っていた。

体調を崩した使用人への気遣い、困った人に差し伸べる手、悲しみに暮れる人へそっと寄り添う姿。

幼い頃から一緒にいたからこそ、アリシアはそんなルーカスの姿をずっと見てきた。

ルーカスが成長して遅くなり、その美貌にますます磨きがかかって、異色である黒髪や濃紺の瞳さえも霞むくらい人気を集めた今も、アリシアの中には優しくして少し気弱なルーカスがいた。

ルーカスの元に腹違いの兄であるニコラオスが訪ねてくるようになったのは、ルーカスが五歳の頃からだという。

アリシアがルーカスに出会った時にはもうニコラオスはよく訪れていたようだが、顔を合わせたのは少し経ってからだった。

おそらくルーカスがニコラオスの存在を受け入れるまで時間がかかったのだろう。そしてルーカスの中でニコラオスが兄として認められるようになって初めて、アリシアに紹介してくれたに違いない。

ニコラオスはルーカスがアリシアと一緒にいる時に来ることも多く、その太陽のような性格も相まって打ち解けるまでに時間はかからなかった。

それでも、貴重な兄弟の時間を邪魔するのは気が引けて、アリシアはニコラオスが来ている時はなるべくルーカスに会いに行かないように遠慮していた。

そんなある時、アリシアはニコラオスが美しい女性を連れてきたところに出会ったのだ。

その女性、フォティアはニコラオスの婚約者だという。

ちょうどニコラオスが学園へ上がる頃で、ルーカスは十歳だった。

学園へ入学してしまうと今までのように頻繁に会いに来ることができなくなるからと、ニコラオスは時間の許す限りルーカスの元に顔を出していた。

たびたびフォティアを伴っていたのは、先々のことを考えて弟と婚約者の交流を願ったのかもしれない。

フォティアはルーカスにとって初めて異性を意識させる存在だったのだろう。

ルーカスはフォティアが来る日はそわそわとして落ち着きがなく、目が合えば照れたように顔を伏せた。

淡い初恋であり、ルーカスとしてもその気持ちを伝える気はなかったのだろうけれど、彼の中でフォティアの存在が大きくなっていくのをアリシアはすぐそばで見ている。

ルーカスは人の気持ちに聡い分、自分の気持ちを隠すのに長けている。だからフォティアに対する気持ちも上手に隠していた。

はたから見れば兄の婚約者に慣れず照れている弟、そんな彼の初々しさを周りは微笑ましく感じている、そんな状況だった。

でもアリシアは気づいていた。フォティアを見つめるルーカスの瞳に熱があることを。

それはアリシアがルーカスのことを好きで、誰よりも彼を見つめていたからわかったことだ。

誰かが誰かを思う気持ち、それ自体は何も悪いことではない。

ルーカスがフォティアへの恋する気持ちを呑み込み、その想いを昇華するまで、アリシアはずっとルーカスに寄り添っていた。

彼の気持ちが自分に見続けたのが悲しくなかったわけではない。でも今までつらいことの多かったルーカスの、柔らかい心ごと包み込みたかったから。

その気持ちを手放して欲しいとは思えなかった。



昼の暖かな日差しが差し込む窓際の机で、お気に入りの便箋を広げたアリシアは、ペンを取っては何も書くことができずに置くことを繰り返していた。

あの日、王都の店にいたことを聞こうか。それともいつもと同じ近況の手紙にしようか。

今のルーカスと自分を繋ぐ唯一の方法である手紙に何を書くか、アリシアは朝からずつと頭を悩ませていた。

正直な気持ちを言えば聞いてしまいたい。

あの日のルーカスとフォティアの姿が頭から離れないから、いつそのことはつきりさせてしまいたいと思う。

でも同時に、忙しい最中に手を煩^{わづら}わせたくない気持ちもある。

アリシアとてルーカスを疑っているわけではない。決して嘘をつかない彼は、いつだってアリシアへの想いを伝えてくれているから。

それでも、人の心は変わるもの。この世の中に絶対なんてものはない。

思い悩み何枚か書き損じて、それでもアリシアは手紙を書き上げた。

結局手紙にはルーカスを案じていることとアリシアの近況、そして忙しいとは思っけれど会いたいという想いを書いた。

ルーカスに負担をかけたくなかったから、今まで書いたことはなかったけれど。

それでも今回は……

遠目でも見かけてしまったからこそさらに会いたくなっている。今もちゃんと想ってくれていることを、目を見て確認したい。

わがままかもしれないけれど、ここは我慢しなくてもいいのではないかと思った。これからまだ会えない時間が続くのならなおのこと、素直に気持ちを伝えておきたい。

「ルーカスはどう思うかしら」

これでいいと思ったのに不安はつのる。

アリシアの独り言のような言葉に、しかし答える人はいなかった。



兄の死以降、ルーカスの生活は一変した。

今までは騎士として体を鍛え、王都の警備のために勤務に就く日々だった。それが今では公爵家の執務室に籠もり、新しく覚えなければならない膨大な量の業務を目の前にしている。

これまでに家の執務を少しでも手伝っていたのならまた違ったのだろう。しかし何もかもが初めての身では山積みの業務をさばきることができない。

タウンハウスの家令と義母に教えてもらいながらこなしているとはいえ、現状はまったく追いついていない状態だった。

とはいえ当主が変わったことは領民には関係のないことで、領地に損害を与えないようにしなければならぬ。

そんなルーカスは、今まで近寄ってこなかった公爵家のタウンハウスに居ること自体が息苦しかった。

無意識に首元に指を入れてタイを緩めていた自分に気づき、ルーカスは小さなため息をつく。根を詰めたところで効率が下がるだけだとわかつてはいても、今は一分一秒でも惜しかった。

微かに頭痛のする頭を振り、ふと視線を上げるとローテーブルの上に置かれた手紙の束が見える。その中にアリシアからの手紙があることに気づいた。

ルーカスは一息入れるために侍女にお茶を頼むと、その束を手取る。

息詰まるような日々の中で、アリシアからの手紙を読んでいる時だけは気が休まった。

思えばもう一ヶ月以上会えていない。

同じ王都内にいるのだから少しでも会いに行きたいのに。しかし現状、執務のことだけではない悩みがルーカスにはあった。

アリシアからの手紙を開けば、ルーカスには馴染んだ香りがする。彼女の好む香水はほんのりと甘い。

そっと寄り添うような香りに包まれて、ルーカスはホッと安心したような息をついた。

ゆっくりと便箋に視線を落とせば、そこにはいつものようにルーカスを気遣う言葉とアリシアの近況が書いてある。

そして最後に、常にはない一言がつけ加えられていた。

『会いたい』と。

「……！」

アリシアからの希望をはっきり伝えられたのは初めてだった。

言葉からも態度からも、好意はいつも感じていたけれど、彼女がルーカスに何かを望むことは少なかったからだ。

ルーカスとしては少しくらいわがままを言って欲しくらいだったが、アリシアはルーカスのことを気遣ってばかりだった。

(すぐにでも会いに行きたい！)

突き上げるような衝動にかられ、椅子から立ち上がったところでルーカスは動きを止める。

想う心のまま行動したいけれど、理性がそれを押しとどめた。

行くか、行かないか。

アリシアを想う気持ちはあふれそうなのに。

どこまでも冷静な部分を失わない自分に、ルーカスはやるせない思いを抱いた。

幕間 — イレーネ・ディカイオ —

前公爵夫人イレーネ・ディカイオは元々侯爵家の出だ。上に二人の兄を持つ末っ子で唯一の女性でもあった。

両親は貴族では珍しく夫婦仲が良く、家庭環境としては恵まれていたのと思う。何不自由なく育ち、王都の学園で前公爵のセルジオスと出会った。

セルジオスはその立場はもちろんのこと、優れた容姿に気配りの行き届いた対応、困難なこともあつさりとやり切ってしまう能力を持っていた。

だから多くの令嬢たちが熱を上げており、イレーネも彼に憧れている一人だった。

幸いにしてイレーネは他の令嬢方よりもセルジオスとの接点があった。

ディカイオ公爵家とは家同士のつき合いがあり、また、学園ではセルジオスと同じ生徒会に所属していたこともあつてか、気づけばどの令嬢よりも彼の近くにいた。

長く片想いを続けていたイレーネであつたが、そんな自分に対してセルジオスが想いを返してくれた時、心の底から嬉しかったのを覚えている。

お互いの気持ちを知ってからの学園生活はそれまで以上に楽しいものだった。

今思い返しても眩しい心地になるような学園生活を送ったのち、セルジオスとイレーネは結婚し

た。そしてほどなくして子宝に恵まれる。

心から自分のことを愛してくれる夫と可愛い子ども。まさに順風満帆の人生と言えた。

しかしイレエネは、この上ない幸せに長く浸ることはできなかった。

イレエネの人生に小さな影が差したのは、嫡子のニコラオスを出産した後だ。産後の肥立ちが悪く、時間をかけて体調こそ回復したがこれ以上の子を望めなくなった。

折しも戦争の影響で国が出生数の増加を求め始めた頃でもあった。

特に高位貴族には、少なくとも二人の子を持つように推奨したのだ。

ロゴス国は王族以外は一夫一妻制である。だがこのことに關して、四大公爵家は愛人を迎えてでも子を二人以上得るように厳命されていた。

そうなれば、セルジオスは何らかの方法でもう一人子を持たなければならない。

イレエネは悲しみに暮れた。ニコラオスは可愛かったし、公爵家に嫁いできた者の義務である後継者は生んだ。それなのに、なぜこんな思いをしなければならないのか。そう思った。

二人は何度も話し合いを重ね、セルジオスはイレエネの気持ちを尊重して親戚の中から養子を取することに決めた。

子を持つことだけを考えれば、それもまた一つの方法ではある。

国としてはなるべく直系の血を残すことを求めているが、イレエネを愛するセルジオスは国王と交渉してその希望を通した。

国への義務を半ば破るようなものでありイレエネとしても心苦しくはあったが、それと同時に夫

からの愛を感じて喜びを覚えたのもたしかだった。

それからしばらくの間、イレエネの心は平穏に包まれていた。

だからその状況が覆ることがあるなんて思いもしなかったのだ。

セルジオスがイリオン国の第二王女を娶ることになるのは、それから三年後のことだった。

戦争が終結して、イリオン国からの補償の一部として第二王女が興入れしてくることはイレエネも知っていた。そして、その王女は王太子に嫁ぐものだと思っていた。

その日、イレエネはセルジオスから王女の降嫁先がセルジオスの元であるとの話を聞いて、目の前が真っ暗になるのを感じた。

セルジオスとしても王女は王太子が娶るべきだと進言はしたらしい。

しかし、王太子にはすでに王太子妃を含め三人の妃がいたため、これ以上の妃を持つこと、さらにはそれが隣国の王女であることは揉め事を増やすだけだと判断されたようだった。

人質のような存在とはいえ、相手は隣国の王女。

王太子ではないなら王族かそれに準じる公爵家へ降嫁させる必要があった。そこで白羽の矢が立ったのがセルジオスだ。

そもそもが、戦争の影響で王族にも四大公爵家にも適齢期の者が少ない。また、現在四大公爵の中で子が一人しかないのはディカイオ家だけだった。

いわば、王女の降嫁は王命だったといえる。

国の決定にイレネは嘆いた。自分がもう一人子どもを生める身体だったらと自身を責めた。でもどう足掻いても現実が変わらない。

そんなイレネに対して、セルジオスは一つの約束をした。

王女には領地のカントリーハウスで暮らしてもらい、王都のタウンハウスには足を踏み入れさせない。

また、それを王女も了承していると云った。

どうしても受け入れなければいけない現実を前に、イレネの心情を最大限考慮した措置だというの理解できた。

気持ちの上では到底納得できないけれど、イレネは仕方なくその王命を受け入れた。

そしてほどなくして、王女はデカイオ家にやって来たのだ。

降嫁後、約束通り王女は領地から出ることなく王都へも来なかった。セルジオスは時々領地へ赴いていたが、王女は亡くなるまでついにはただの一度も、イレネの前にその姿を現さなかったのだ。その姿勢から、王女が自身の立場をきちんとわきまえていたのだと、わからないほどイレネも愚かではない。

だから王女が若くして亡くなった後、遺されたルーカスを受け入れた。

ルーカスが学園へ入学するために王都にやって来てからは、義理の母として生活を助けた。直接的なやり取りはすべてニコラオスがしていたけれど、必要があれば顔を合わせることもあった。

それでも、イレネにとってルーカスの存在は痛みを伴うもので、その彼を受け入れることは大

きな出来事だった。

このまま時間をつみ重ねていけば、いつかから家族だと思えるようになるかもしれない。イレネもまたそう感じていたのに。

ニコラオスの死が、イレネの心に重くのしかかる。

時間をかけて歩み寄ってきた心がゆっくりと歪んでいくのを、イレネはどうすることもできなかった。

ニコラオスが王太子をかばい命を失って、茫然としていられた時間はしかし短かった。

公爵家としての執務が待たなして降りかかってきたからだ。

タウンハウスとカントリーハウスのそれぞれにデカイオ家は家令を置いている。ロゴス国の高位貴族は管理する領地も大きい。大きさにあわせて、家令と執事を置く家と執事だけを雇う家とがあるのはそのせいだった。

イレネは家令たちの力も借り、自身が知り得る限りの知識と情報をルーカスに教える。

たとえその場のぎであつても、現在デカイオ公爵家の当主はルーカスであり、すべての決定は彼を通さなければならなかった。

ここに来てルーカスに公爵家の執務を教えてこなかった弊害が現れるなんて。

イレネはそう思い過去の選択を悔やんだが、しかしあの時の自分はそうすることしかできなかったのだとも思った。

セルジオスとニコラオスはルーカスにも執務の一部を任せるべきだと言った。跡継ぎはニコラオスであるが、何かあった時はルーカスが代わりの立場になるのだからと。

わかつてはいたがイレーネは領けなかった。どうしても、ルーカスの存在を受け入れることができなかったからだ。

何よりもセルジオスという頼もしい当主がおり、ニコラオスという跡継ぎがいるのならそれ以上に必要ないと突っぱねた。

もちろん、本来であれば当主の考えに妻が口を出すことはできない。しかしルーカスの出自のせいか、セルジオスはイレーネの希望を聞き入れた。

そんなことを思い返しながらも、過去のことを今さら悔いても仕方ないとばかりにイレーネは無我夢中で執務をこなした。そうやって必死に過ごしてしばらくした時、ふっと気が抜けたその瞬間に。

イレーネは気づいてしまった。

このままルーカスがアリシアと結婚して二人の間に子どもが生まれたら、ディカイオ公爵家の血筋から自分だけが外れてしまうことに。

当初の予定通りニコラオスとフォティアの子が継ぐのであれば、それはセルジオスとイレーネの血を引いた子になる。

イレーネは王女に夫を奪われたわけではない。

しかしそう理解していても、セルジオスと王女の血を引く者がディカイオ公爵家を継いでいくこ

とを、許せない自分がいた。

ルーカスが当主となったのは避けられないことだったとしても、その先、ルーカスの次に跡を継ぐ子はフォティアのお腹にいるニコラオスの子でなくてはならない。

ならばどうすればいいのか。

イレーネはただただその考えに囚われていく。

そうして、自身の考えがおかしいと気づくこともできず、自分の行動が誰にどれだけ影響しているのかも考えられず、イレーネの思考は妄執に取り憑かれて沈んでいくのだった。

第二章 囚われるもの

突き抜けるような青空の日だった。アリシアの学園時代の友人であり、同じ伯爵令嬢のリサが結婚した。

新たな門出のお祝いに、あたりには笑顔があふれている。

チャペルから出てきたリサは真っ白なドレスに身を包み、その場にいる誰よりも輝いていた。

「結婚おめでとう！」

「おめでとう!!」

あちこちからかけられる祝いの言葉にリサも嬉しそうだ。

「結婚おめでとう！ 素敵な結婚式だったわ」

「ありがとう。次はあなたの番よ、アリシア」

そう言ってリサがブーケを渡してくれる。

「綺麗ね。でも私の方はもう少し先になると思う」

アリシアの言葉にリサがかすかに顔を曇らせた。

「ニコラオス公のことは残念だったわね。ルーカス公はやはりお忙しいのかしら？」

「そうね。なかなか会えないくらいには」

「……アリシアは最近ルーカス公にお会いしていないの？」

「ええ」

アリシアの返答に、リサはつかの間黙ったあと躊躇^{ためら}いがちに切り出した。

「家のつき合いの関係上、パメラ様もご招待しているけれど、今日はなるべく近寄らない方がいいと思うわ」

パメラといえばアリシアと同じ伯爵家の令嬢で、学園の在学中からルーカスに執心していた女性だ。

詳しくは語りたがらないリサの様子にあまり良い話ではないことがわかれ、アリシアは思わずため息をつきそうになった。もちろん、祝いの席でため息はいただけないと慌てて吞み込んだけれど。

「忠告をありがとう。パメラ様にはお会いしないように気をつけるわね」

せっかくの祝いの席で心配をかけてはいけないし、元々パメラとは親しくもない間柄だ。アリシアとしてもあえて嫌な思いをするとかわかっていて近づくつもりはなかった。

しかし、往々にして嫌なことというのは向こうからやってくるものなのだろう。

「そちらにいらっしゃるのはアリシア様ではなくて？」

リサへ祝いの気持ちを伝えることもできたし、退席は自由と聞いていたので早々に失礼しようと思っていたところでパメラに捕まってしまった。

「ごきげんよう。パメラ様」

「ごきげんよう。今日は素敵な結婚式でしたわね」
仕方なしにアリシアが挨拶をすれば、何かを企んだような顔をしたパメラが手にした扇を広げながらそう答える。

いかにも一緒にお祝いをしたいとでもいうように近づいてきたパメラの、その顔に浮かんでいる表情は決して良いものではない。

「そういえばアリシア様はご存じかしら？」

獲物を見つけた獣のように、パメラは目を細める。

「何のことが仰っていただかなければわからないわ」

「最近ルーカス公がフォティア様と頻繁にお出かけになっていらつしやるみたいですから」

先日ドレスを扱う店の入り口で見かけた二人の姿がアリシアの脳裏に浮かんだ。

胸がズキリと痛み、とつさに胸元に手を当てたが、アリシアはその動揺を表情には出さなかった。「フォティア様はご懐妊されてお身体を気づかう必要がありますし、気晴らしのお出かけも大切ですから。身近にいらつしやるルーカス様がお手伝いをされるのも当然だと思いますわ」

社交界において、弱みを見せることは相手につけ入る隙を与える行為でしかない。パメラがアリシアに対して好意的でない以上、アリシアも隙を見せるわけにはいかなかった。

「私もそのことを知っていますけれど、それがどうかしまして？」

本当は、アリシアは二人が出かけたことなど聞いていなかった。あの時偶然見かけなければ知らないままだっただろう。

（何も知らずにパメラ様の言葉を聞いたら、かなりショックを受けたかもしれないわ）

そう思ったけれど、そんなことをパメラに気づかせるようなことはしない。

「あら知っていましたの。いくらフォティア様がニコラオス公の婚約者だったとはいえ、ご自身の婚約者を放っておいて……ねえ？ あれでは誰がルーカス公の婚約者なのかわからないわ」

それは言外に、ルーカスにとつてはアリシアではなくフォティアこそが大切な存在なのだと知っているようなものだった。

「変な勘ぐりをされるのはパメラ様の品位を疑われてしまいますわ。それに、人の事情に口を出すのは褒められた行為ではないのではなくて？」

元々アリシアは温厚な性格で誰かとやり合うことは得意ではない。それでも、受け身でいるだけでは渡り合えないのが社交界だとわかっていた。

そしてここはきちんと釘を刺しておくべきところだ。

そう思いパメラの目をしっかりと見返せば、まさかアリシアから反撃されるとは思ってもいなかったのか彼女の顔がサツと赤くなる。

学園でも害がない限り噂話は放っておいたから、パメラはアリシアから言い返されるとは想像もしていなかったに違いない。

「お話がそれだけなら失礼しますわ」

何も言うことがでなくなつたパメラを見て、これ以上つき合う必要はないと判断したアリシアはそう一声かけるとその場を後にした。